

モアブを目指して挫折したイスラエルのヨラム王は、ユダのヨシヤパテ王の助言で預言者エリシャから導きを求めました。すると、溝を掘れば風や大雨がなくても谷に水が溢れることが示され、その通りになりました。さらに、モアブも彼らの手に渡されることが預言されたのです。

1. イスラエル連合軍とモアブ (21～23節)

①モアブは国堺の守備に (21)「モアブはみな、王たちが彼らを攻めに上って来たことを聞いた。よろいを着ることのできるほどの者は全部、呼び集められ、国堺の守備についた。」さて、一方のモアブの人々ですが、イスラエル、ユダ、エドムの王達が大挙して攻め上って来ているという情報を耳にしました。それがモアブ王メシャが貢物をイスラエルに納めなくなっていることに因があることを薄々感じていました。ともあれ、迎え撃つために、戦える人々は召集され国境に派兵されました。

②太陽が水の面に (22)「彼らが翌朝早く起きてみると、太陽が水の面を照らしていた。モアブは向こう側の水が血のように赤いを見て、」さて、モアブの兵達が国境の地で夜を迎えて、おそらくは恐れのおいでいっばいだったでしょう。ところが、彼らが朝起きたころです。なんと太陽がゼレデ川の水の面に照らし、それがモアブの側から見ると、血が一面に広がって赤く染めているように見えたのです。

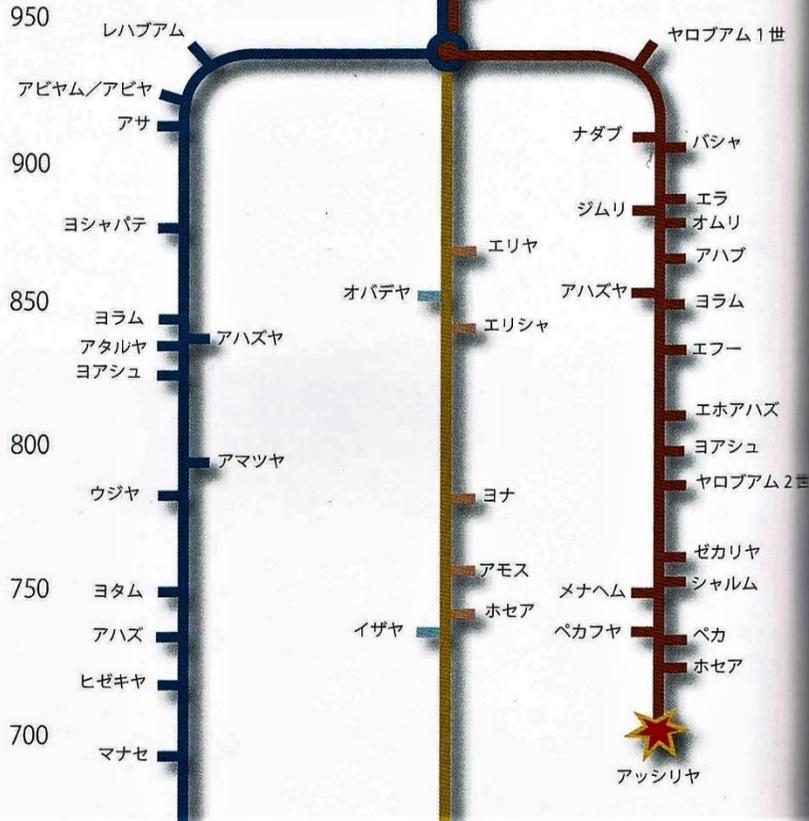
③同士討ちと思う (23)「言った。『これは血だ。きっと王たちが切り合って、同士打ちをしたに違いない。さあ今、モアブよ、分捕りに行こう。』」そして、彼らは言ったのです。水が血に染まっている！これは彼らが仲間割れして、切り合った結果、流された血が水にまで流されているのだと思い込んだのです。これはチャンスだと思ったのです。「モアブの軍の者達、今こそ前進だ、相手を撃破しようではないか。」

2. 進軍するイスラエル連合軍 (24～25節)

①攻め入り打たれるモアブ (24)「彼らがイスラエルの陣営に攻め入ると、イスラエルは立ってモアブを打った。モアブはイスラエルの前から逃げた。それで、イスラエルは攻め入って、モアブを打った。」彼らがイスラエルの陣営に攻め入るには、川を渡らなければなかったと思われまます。浅瀬を選んで進んだのでしょう。ところが、モアブ軍が進んでいけば、イスラエル連合軍はそれを待ち受けるようにしていました。こんなはずではないと思ったでしょうが、モアブ軍は逃げるしかありませんでした。戦いはイスラエル連合軍の側のものでした。イスラエル連合軍は逃げるモアブ軍を追い込んで攻めたてていきました。モアブ軍は打たれました。

1050
1000

イスラエルとユダの王
.....
イスラエル、ユダの諸王は、バビロニア、アッシリヤなど大帝国の影に左右されながら国を治めた。



②攻め入り進軍するイスラエル (25) 「さらに、彼らは町々を破壊し、すべての良い畑にひとりずつ石を投げ捨てて石だらけにし、すべての水の源をふさぎ、すべての良い木を切り倒した。」イスラエル連合軍は改めて、川を渡り、モアブの国に入り、順に町々を攻撃していきました。①すべての良い畑に、一人ずつ石を投げて石だらけにする。②すべての水の源を塞ぐ。③すべての良い木を切り倒す。これらは預言者エリシャによって預言された通りでした。彼らは確かに戦勝したのです。

③首都キル・ハレセテも (25) 「ただキル・ハレセテにある石だけが残ったが、そこも、石を投げる者たちが取り囲み、これを打ち破った。」地図をご覧ください。首都だったキル・ハレセテはモアブ最後の要害でした。石を盾のようにして、そこを守っていた軍をも、イスラエル連合軍は打ち破って占領したのです。

3. 引き揚げるイスラエル連合軍 (26~27 節)

①モアブ王も進めず (26) 「モアブの王は、戦いが自分に不利になっていくのを見て、剣を使う者七百人を引き連れ、エドムの王のところに突き入ろうとしたが、果たさなかった。」ここまでくると、モアブ王メシャも、戦況が極めて自軍にとって不利であることがわかりました。精鋭の剣の使い手七百人を従えて、エドム川に改めて攻め込もうともしました。しかし、もはやそれが無理であることは、明らかでした。それほどに、モアブ軍は弱体化していたのです。攻め込むだけの力が残っていなかったのです。

②長男を全焼のいけにえに (27) 「そこで、彼は自分に代わって王となる長男をとり、その子を城壁の上で全焼のいけにえとしてささげた。」ここまで来て、モアブ王は最後の手段に出ます。それは自らの後継者となる長男を犠牲とする道でした。アブラハムがイサクを神にささげようとした出来事 (創世記 22 章) を想起させます。しかし、ここではモアブの国家神であるケモシュの神に、長男をささげるという名目で、全焼のいけにえにすることでした。それも、両軍からはっきりと見ることが出来る城壁の上で、それを行うことにしたのです。モアブ王は自分の分身である息子をほふり、全焼のいけにえにすることにしたのです。そのようにして、息子をささげることで、命を張ったのです。そして、彼はそれを実行しました。

③イスラエルに対する怒り (27) このため、イスラエル人に対する大きな怒りが起こった。それでイスラエル人は、そこから引き揚げて、自分の国へ帰って行った。」さすがに、こればかりはイスラエル側も予測していませんでした。自軍の王の後継者がいけにえにされたのを見た、モアブの民はその死を悼みました。そして、このような事態を招いたイスラエルの軍に対して怒りをぶちまけたのです。イスラエル連合軍も同じ人の子です。それ以上の攻撃をかけることは

せずに、そこから引き揚げて、エドムへの道に戻るようになったのです。その姿は、勝利者にして敗戦者のようでもあったと思われます。何と言っても、若き王の子の命が犠牲になったのですから。イスラエルは実際の被害は少なくありましたが、両者は痛み分けのようにも見えました。精神的ショックと傷がイスラエル軍にはあったからです。

《結論》

この戦いは、モアブがイスラエルに逆らい、それまで納めていた貢ぎ物を行わなくなったことに発しました。大事な収入源を失ってしまったイスラエルのヨラム王からすれば、なんとしてもこれを取り戻さねばと考えたのです。ユダのヨシャパテ王やエドム王からの助勢を得て、進もうとしました。ところが、知恵不足で水の補給ができなくなり、預言者エリヤのところに出かけて、勝利の約束をいただいたのです。

その預言通り、エドムから谷に流れる水が与えられたのに続いて、今朝の聖書箇所においては、イスラエル連合軍はモアブに勝利します。つまり、連合軍が同士討ちして弱体化しているとモアブ軍は勘違いしてしまったのです。連合軍からすれば、飛んで火にいる夏の虫です。攻め込んで来たモアブ軍を、連合軍は一網打尽にすることになりました。その後、連合軍はモアブの地に入り、次々とモアブ軍を打ち破り、すべての良い畑を石だらけにし、水源を塞ぎ、すべての良い木を切り倒すという、エリシャを通して与えられた預言は、確かに成就したのです。イスラエル連合軍は勝利したのです。

ところが、イスラエル連合軍からすれば、なんとも後味の悪い戦いになってしまいました。つまり、モアブ王のメシャが最後に打った手は、息子を差し出して全焼のいけにえにするというものでした。それが誰にも見える城壁の上でされたことにより、イスラエル連合軍は大いに批判を受け、帰国を余儀なくされることになってしまったのです。立ち去る様は、まるで敗者のようでした。イスラエルに神が教えられてきたのは「聖絶」でした。残すことなく打ち破ることでした。ところが、今それは果たせずに、そこを引き返すことになってしまったのです。その面からすれば、イスラエル連合軍は勝利はできなかったともいえるでしょう。

これが私たちの霊的戦いだとすると、どうでしょうか。悪霊との戦いに勝利をして来た人が、最後の最後に人間の情のようなものを差し出されて、ついつい妥協をしてしまうというようなことがあるのではないのでしょうか。その結果、それまで霊的勝利をしてきたと

しても、いつの間にか悪霊に肝心な魂の大切なものを奪い取られてしまうことになってしまうなどということがあるのです。そうなれば、妥協が妥協を生んで、自らの魂を悪霊に売ってしまうことにもなりかねません。

最後のところでエリシャの勝利の預言の成就がならなかったのは、私たちへの戒めのようにも思われます。三度もイエスを知らないと言ってしまったペテロを赦してくださった主は、裏切ったイスカリオテのユダをお赦しにはなりませんでした。つまり、主の温情を最初からあてにするあり方ではなく、「わたしについて来たいと思うなら、自分を棄て、日々自分の十字架を負って」(ルカ 9:23)とあるように、キリストに従う道をとっていくことが、まずは求められているのです。その主キリストが、私たちの霊的な戦いに先立ってくださるのです。失敗や挫折もあるでしょう。しかし、どんな場合でもキリストから目を離さずに進んでいこうではありませんか。